

ルベグ積分を知らないコンプレックスから脱却する 動画

緒方秀教

電気通信大学大学院 情報理工学研究科 情報・ネットワーク工学専攻

April 1, 2024

はじめに

ルベーグ (Lebesgue) 積分 (測度論)

- 応用数学にもよく現れる.
 - 関数解析: L^p 空間 ($p \geq 1$)

$$L^p(\mathbb{R}) := \left\{ f(x) \mid \int_{\mathbb{R}} |f(x)|^p dx < \infty \right\}.$$

ここに現れる積分はルベーグ積分である.

- 確率論: 測度論を使って定式化される.
- ところが, 理学部数学科以外では授業をする所が少ない.
- 数学科以外出身の応用数学者
... ルベーグ積分を知らないコンプレックス.

はじめに

ルベーグ (Lebesgue) 積分 (測度論)

- 応用数学にもよく現れる.
 - 関数解析: L^p 空間 ($p \geq 1$)

$$L^p(\mathbb{R}) := \left\{ f(x) \mid \int_{\mathbb{R}} |f(x)|^p dx < \infty \right\}.$$

ここに現れる積分はルベーグ積分である.

- 確率論: 測度論を使って定式化される.
- ところが, 理学部数学科以外では授業をする所が少ない.
- 数学科以外出身の応用数学者
... ルベーグ積分を知らないコンプレックス.

この動画の目的

ルベーグ積分を知らないコンプレックスを解消する.

- ルベーグ積分論 (測度論) の概略を説明.
- 主要 2 定理 (極限定理, リース・フィッシャーの定理) の紹介・一部証明.

Contents

- ① はじめに
- ② ルベグ積分とどう付き合うか？
- ③ ルベグ積分論の概略 (1)：測度空間
- ④ ルベグ積分論の概略 (2)：積分
- ⑤ 極限定理
- ⑥ リース・フィッシャーの定理
- ⑦ まとめ
- ⑧ 補遺

Contents

- 1 はじめに
- 2 ルベグ積分とどう付き合うか？
- 3 ルベグ積分論の概略 (1)：測度空間
- 4 ルベグ積分論の概略 (2)：積分
- 5 極限定理
- 6 リース・フィッシャーの定理
- 7 まとめ
- 8 補遺

ルベグ積分とどう付き合うか？

ルベグ積分を知らないコンプレックスの解消法

簡単な教科書でさっさと独学する．

- 勉強しないから「知らない」コンプレックスを抱えたままになる．
さっさと勉強してしまって「知れば」よい．
- 薄くて簡単な教科書で十分（分厚い本は心が折れる）．
- 私が勉強した教科書．
竹之内脩「ルベグ積分」（培風館，1980年）．
いまは絶版になっているらしい（2024年4月現在）．
以降，この本をネタ本にして説明をする．

ルベグ積分とどう付き合うか？

ルベグ積分を独習する際の指針

ルベグ積分論が必要なのは、次の 2 定理があるからである。

- 極限定理 . . . 積分と極限の順序交換

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\mathbb{R}} f_n(x) dx = \int_{\mathbb{R}} \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) dx.$$

が（リーマン積分に比べて）かなり緩やかな条件で可能である。

- リース・フィッシャー (Riesz-Fischer) の定理。
. . . L^p 空間の完備性。

このふたつを学ぶことを目標にして勉強する。

本動画では次のように話を進める。

- はじめに、ルベグ積分論の概略を与える。
- 極限定理、リース・フィッシャーの定理の紹介。後者の証明。

この動画の PC スライドを概要欄の URL に載せておきます。

Contents

- 1 はじめに
- 2 ルベグ積分とどう付き合うか？
- 3 ルベグ積分論の概略 (1)：測度空間**
- 4 ルベグ積分論の概略 (2)：積分
- 5 極限定理
- 6 リース・フィッシャーの定理
- 7 まとめ
- 8 補遺

ルベグ積分論の概略 (1) : 測度空間

まず、ルベグ積分論の舞台である**測度空間**を定義する。

可測空間 (S, \mathcal{M}) .

- S : 全体集合 (空間). ルベグ積分論の舞台.
- **σ 集合族** \mathcal{M} : S の部分集合族で次を満たすもの.
 - ① $S, \emptyset \in \mathcal{M}$.
 - ② $M \in \mathcal{M} \Rightarrow M^c \in \mathcal{M}$.
 - ③ 可算無限個の $M_1, M_2, \dots \in \mathcal{M}$ ならば,

$$\bigcup_{n=1}^{\infty} M_n \in \mathcal{M}, \quad \bigcap_{n=1}^{\infty} M_n \in \mathcal{M}.$$

- 可測集合 : \mathcal{M} に含まれる集合.

可測集合に対しその**測度**を与える (長さ・面積・体積を一般化したもの).

ルベーグ積分論の概略 (1) : 測度空間

測度空間 (S, \mathcal{M}, μ)

可測空間 (S, \mathcal{M}) に対し次を満たす**測度**と呼ばれる写像

$$\mu : \mathcal{M} \rightarrow \mathbb{R} \cup \{+\infty\}$$

を与えたもの.

- ① $0 \leq \mu(M) \leq \infty$ ($\forall M \in \mathcal{M}$).
- ② $\mu(\emptyset) = 0$.
- ③ **完全加法性**: 可算個の $M_1, M_2, \dots \in \mathcal{M}$ で $M_m \cap M_n = \emptyset$ ($m \neq n$) なるものに対して,

$$\mu \left(\bigcup_{n=1}^{\infty} M_n \right) = \sum_{n=1}^{\infty} \mu(M_n).$$

測度: ユークリッド空間における長さ・面積・体積の一般化.

測度論: 抽象的な空間に長さ・面積・体積の概念を与える.

ルベーク積分論の概略 (1) : 測度空間

測度空間の例

確率論：ルベーク積分論の言葉で定式化する。

- 確率空間 (Ω, \mathcal{F}, P) : 測度空間のひとつ。
- Ω : 標本空間。
- 事象 : 可測集合 $F \in \mathcal{F}$.
- 事象 F が起こる確率 : F の測度 $P(F)$.
- 完全加法性 : 事象 $F_1, F_2, \dots \in \mathcal{F}$ がどの 2 つも同時に起こり得ない ($F_m \cap F_n = \emptyset$ ($m \neq n$)) ならば,

$$P\left(\bigcup_{n=1}^{\infty} F_n\right) = \sum_{n=1}^{\infty} P(F_n).$$

事象 F_1, F_2, \dots のどれかが起こる確率は、各事象の確率 $P(F_1), P(F_2), \dots$ の和。

- $P(\Omega) = 1$... あらゆる事象のどれかが起こる確率=1.

ルベグ積分論の概略 (1) : 測度空間

速度空間の例

数直線 \mathbb{R} (ユークリッド空間 \mathbb{R}^N) を基とする測度空間 $(\mathbb{R}, \mathcal{B}, m)$.

- ボレル集合体 \mathcal{B} : \mathbb{R} の開集合全体 \mathcal{O} から生成される可測空間.

$B_1, B_2, \dots \in \mathcal{B}$ ならば $\bigcup_{n=1}^{\infty} B_n, \bigcap_{n=1}^{\infty} B_n \in \mathcal{B}$ としたいから,

- \mathcal{O} に \mathbb{R} の閉集合 (=開集合の補集合) を \mathcal{O} に足す.

- 開集合 O_1, O_2, \dots の共通部分 $\bigcap_{n=1}^{\infty} O_n$ を足す.

(和集合 $\bigcup_{n=1}^{\infty} O_n$ は開集合 $\in \mathcal{O}$)

- 閉集合 C_1, C_2, \dots の和集合 $\bigcup_{n=1}^{\infty} C_n$ を足す

($\bigcap_{n=1}^{\infty} C_n$ は閉集合 $\in \mathcal{B}$).

- ...

とやっていって、ボレル集合体 \mathcal{B} をつくる.

- ボレル測度 (ルベグ測度) m :

区間 (a, b) の測度 = $|b - a|$ から出発して、構成する.

Contents

- 1 はじめに
- 2 ルベグ積分とどう付き合うか？
- 3 ルベグ積分論の概略 (1)：測度空間
- 4 ルベグ積分論の概略 (2)：積分**
- 5 極限定理
- 6 リース・フィッシャーの定理
- 7 まとめ
- 8 補遺

ルベグ積分論の概略 (2) : 積分

いよいよ、ルベグ積分を定義する。

可測関数：関数 $f : S \rightarrow \mathbb{R} \cup \{\pm\infty\}$ で次をみたすもの。
任意の定数 α に対し

$$\{f \geq \alpha\} := \{s \in S \mid f(s) \geq \alpha\} \in \mathcal{M}.$$

- f が可測関数なら、次も言える。

$$\{f > \alpha\}, \{f \leq \alpha\}, \{f < \alpha\}, \\ \{f = \alpha\}, \{\alpha \leq f \leq \beta\}, \dots \in \mathcal{M}.$$

f の値の範囲を定める様々な集合 $\in \mathcal{M}$.

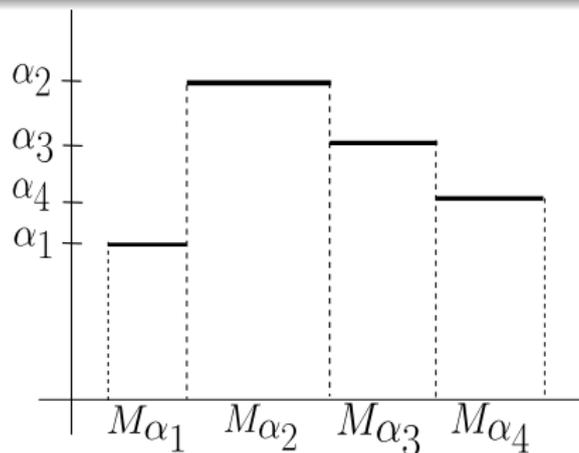
ルベーグ積分論の概略 (2) : 積分

可測関数のシンボリック表示

可測関数 $f(s)$ は関数値の分布を可測集合で表せるもの.

$$f(s) = \sum_{\alpha} \alpha \cdot \chi_{M_{\alpha}}(s), \quad M_{\alpha} = \{ f = \alpha \} \in \mathcal{M},$$

$$\chi_{M_{\alpha}}(s) := \begin{cases} 1 & (s \in M_{\alpha}) \\ 0 & (s \notin M_{\alpha}) \end{cases} \quad \text{集合 } M_{\alpha} \text{ の特性関数.}$$



ルベーク積分論の概略 (2) : 積分

可測関数のシンボリック表示

可測関数 $f(s)$ は関数値の分布を可測集合で表せるもの。

$$f(s) = \sum_{\alpha} \alpha \cdot \chi_{M_{\alpha}}(s), \quad M_{\alpha} = \{ f = \alpha \} \in \mathcal{M},$$

$$\chi_{M_{\alpha}}(s) := \begin{cases} 1 & (s \in M_{\alpha}) \\ 0 & (s \notin M_{\alpha}) \end{cases} \quad \text{集合 } M_{\alpha} \text{ の特性関数.}$$

f, g が可測関数なら, 次の関数も可測関数である。

$$af + bg \quad (a, b : \text{const.}), \quad fg, \quad g/f,$$

$$f \vee g : (f \vee g)(s) := \max\{f(s), g(s)\},$$

$$f \wedge g : (f \wedge g)(s) := \min\{f(s), g(s)\}, \quad \dots$$

f_n ($n = 1, 2, \dots$) が可測関数なら, 次の関数も可測関数である。

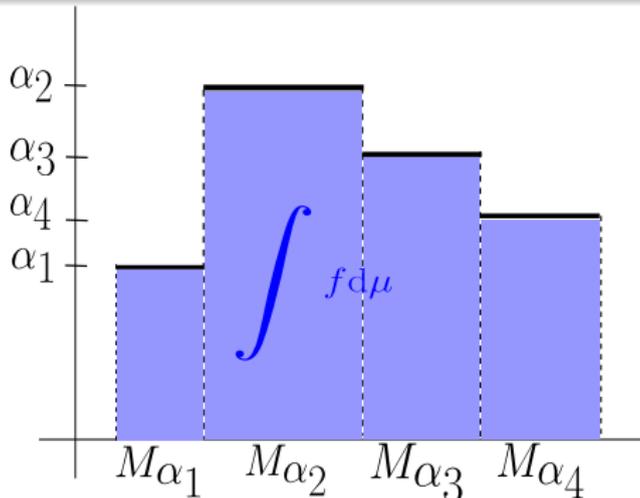
$$\overline{\lim}_{n \rightarrow \infty} f_n, \quad \underline{\lim}_{n \rightarrow \infty} f_n, \quad \lim_{n \rightarrow \infty} f_n \quad (\text{もし存在するなら}).$$

可測関数の積分

$$\text{可測関数 } f(s) = \sum_{\alpha} \alpha \cdot \chi_{M_{\alpha}}(s),$$

↓

$$\text{積分 } \int f d\mu := \sum_{\alpha} \alpha \cdot \mu(M_{\alpha}).$$



ルベーグ積分論の概略 (2) : 積分

もっとちゃんとした積分の定義.

1° : $f(s) \geq 0$ ($\forall s \in S$) の場合.

$$\left. \begin{aligned} \mathcal{O}(\subset \mathcal{M}) : & \text{互いに交わらない可測集合から成る有限部分集合族,} \\ \mathcal{O} = & \{ M_1, M_2, \dots, M_q \} \subset \mathcal{M}, \\ & M_j \cap M_k = \emptyset \quad (j \neq k). \end{aligned} \right\} \quad (1)$$

$$\underline{\sum}_{\mathcal{O}}(f) := \sum_{k=1}^q \inf_{s \in M_k} f(s) \cdot \mu(M_k).$$

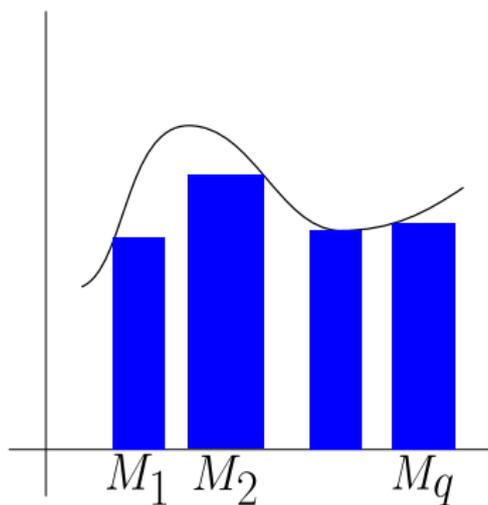
↓

$$\int f d\mu = \int f(s) d\mu(s) := \sup_{\mathcal{O}} \underline{\sum}_{\mathcal{O}}(f)$$

(1) をみたす部分集合族 \mathcal{O} 全体について上限を取る.

ルベーグ積分論の概略 (2) : 積分

$$\int f d\mu := \sup_{\mathcal{O}} \underline{\sum}_{\mathcal{O}}(f)$$



青色部分の面積の和が $\underline{\sum}_{\mathcal{O}}(f)$ ($\mathcal{O} = \{M_1, \dots, M_q\}$).

ルベーグ積分論の概略 (2) : 積分

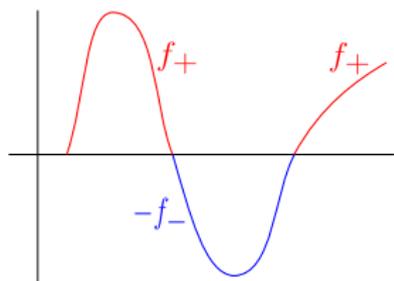
2° : 一般の可測関数 $f(x)$ の場合.

- $f(s)$ を正の部分と負の部分に分ける.

$$f = f_+ - f_-,$$

$$f_+(s) := \begin{cases} f(s) & (f(s) \geq 0) \\ 0 & (f(s) < 0), \end{cases}$$

$$f_-(s) := \begin{cases} 0 & (f(s) \geq 0) \\ |f(s)| & (f(s) < 0). \end{cases}$$



●

$$\int f d\mu := \int f_+ d\mu - \int f_- d\mu.$$

3° 可測集合 $M (\in \mathcal{M})$ 上の積分.

$$\int_M f d\mu := \int f \chi_M d\mu, \quad \chi_M(s) := \begin{cases} 1 & (s \in M) \\ 0 & (s \notin M). \end{cases}$$

従来の積分の性質はそのまま成立する.

$$\int (af + bg)d\mu = a \int fd\mu + b \int fd\mu \quad (a, b : \text{const.}),$$

$$\left| \int fd\mu \right| \leq \int |f|d\mu,$$

$$f \leq g \quad \Rightarrow \quad \int fd\mu \leq \int gd\mu.$$

$\int \rightarrow \int_M$ ($M \in \mathcal{M}$) としてもよい.

可測関数の積分.

$$f(s) = \sum_{\alpha} \alpha \cdot \chi_{M_{\alpha}}(s) \Rightarrow \int f d\mu = \sum_{\alpha} \alpha \mu(M_{\alpha}).$$

測度=0 の集合上の関数値は積分に反映されない.

ルベーグ積分論の概略 (2) : 積分

可測関数の積分.

$$f(s) = \sum_{\alpha} \alpha \cdot \chi_{M_{\alpha}}(s) \Rightarrow \int f d\mu = \sum_{\alpha} \alpha \mu(M_{\alpha}).$$

測度=0 の集合上の関数値は積分に反映されない.

例: $S = [0, 1]$ (実軸上の区間), μ : ルベーグ測度 (長さ).

ディリクレ関数

$$f(x) := \begin{cases} 1 & (x \in \mathbb{Q} \cap [0, 1]) \\ 0 & (\text{それ以外}). \end{cases}$$

$\mathbb{Q} \cap [0, 1]$ は可算集合, 可算集合の測度=0 である.

\therefore 可算集合 $M = \{\alpha_1, \alpha_2, \dots\}$ に対し, $\epsilon > 0$ を任意として

$$\mu(\{\alpha_1\}) \leq 2^{-1}\epsilon, \mu(\{\alpha_2\}) \leq 2^{-2}\epsilon, \dots$$

測度 μ の完全加法性より,

$$\mu(M) = \mu(\{\alpha_1\}) + \mu(\{\alpha_2\}) + \dots \leq (2^{-1} + 2^{-2} + \dots)\epsilon = \epsilon.$$

$\epsilon > 0$ は任意であるから, $\mu(M) = 0$.

ルベーグ積分論の概略 (2) : 積分

可測関数の積分.

$$f(s) = \sum_{\alpha} \alpha \cdot \chi_{M_{\alpha}}(s) \Rightarrow \int f d\mu = \sum_{\alpha} \alpha \mu(M_{\alpha}).$$

測度=0 の集合上の関数値は積分に反映されない.

例: $S = [0, 1]$ (実軸上の区間), μ : ルベーグ測度 (長さ).

ディリクレ関数

$$f(x) := \begin{cases} 1 & (x \in \mathbb{Q} \cap [0, 1]) \\ 0 & (\text{それ以外}). \end{cases}$$

$\mathbb{Q} \cap [0, 1]$ は可算集合, 可算集合の測度=0 であるから,

$$\int_0^1 f(x) dx = 0.$$

ルベーグ積分論の概略 (2) : 積分

可測関数の積分.

$$f(s) = \sum_{\alpha} \alpha \cdot \chi_{M_{\alpha}}(s) \Rightarrow \int f d\mu = \sum_{\alpha} \alpha \mu(M_{\alpha}).$$

測度=0 の集合上の関数値は積分に反映されない.

ほとんどすべての (a.a.), ほとんどいたるところで (a.e.)

- a.a.s に対して (ほとんどすべての s に対して, for almost all s) P が成り立つ.
- a.e. (ほとんどいたるところで, almost everywhere) P が成り立つ.

これらは次を意味するものとする.

$$\mu(\{P \text{ が成り立たないような } s\}) = 0.$$

測度論では測度 0 の集合上の出来事は無視する.

Contents

- 1 はじめに
- 2 ルベグ積分とどう付き合うか？
- 3 ルベグ積分論の概略 (1)：測度空間
- 4 ルベグ積分論の概略 (2)：積分
- 5 極限定理**
- 6 リース・フィッシャーの定理
- 7 まとめ
- 8 補遺

これから紹介する 2 定理はルベグ積分論のいちばん主要な定理である.

- 極限定理
- リース・フィッシャーの定理

ルベグ積分論はこの 2 定理のためにあると言っても過言ではない.

極限定理

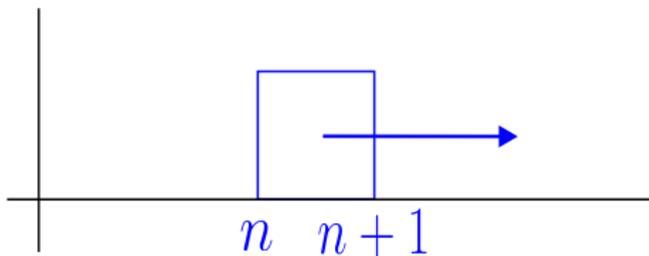
積分と極限操作の順序交換

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu = \int \lim_{n \rightarrow \infty} f_n d\mu.$$

いつも可能とは限らない.

例

$$f_n(x) := \begin{cases} 1 & (n \leq x \leq n+1) \\ 0 & (\text{それ以外}) \end{cases} \quad (n = 0, 1, 2, \dots).$$



極限定理

積分と極限操作の順序交換

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu = \int \lim_{n \rightarrow \infty} f_n d\mu.$$

いつも可能とは限らない.

例

$$f_n(x) := \begin{cases} 1 & (n \leq x \leq n+1) \\ 0 & (\text{それ以外}) \end{cases} \quad (n = 0, 1, 2, \dots).$$

$$\lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) = 0 \quad \text{より} \quad \int_{\mathbb{R}} \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) dx = 0,$$

$$\text{一方} \quad \int_{\mathbb{R}} f_n(x) dx = 1 \quad (n = 0, 1, 2, \dots).$$

$$\therefore \int_{\mathbb{R}} \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) dx \neq \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{\mathbb{R}} f_n(x) dx.$$

極限定理

- リーマン積分：「一様収束」が言えれば積分と極限操作が可能である。
- ルベグ積分：もっと緩やかな条件のもとで，積分と極限操作の交換可能性が言える。
 - 単調収束定理
 - 優収束定理

単調収束定理 (1)

f_n ($n = 1, 2, \dots$) : 可測関数, $0 \leq f_n \uparrow f$.

↓

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu = \int f d\mu.$$

単調収束定理 (1)

f_n ($n = 1, 2, \dots$) : 可測関数, $0 \leq f_n \uparrow f$.

↓

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu = \int f d\mu.$$

$f_n \geq 0$ の代わりに「 f_1 は積分可能」を仮定してよい
($f_n \rightarrow f_n - f_1$ として上定理を適用し, $\int f_1 d\mu$ を加える).

単調収束定理 (1)

f_n ($n = 1, 2, \dots$) : 可測関数, $0 \leq f_n \uparrow f$.

↓

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu = \int f d\mu.$$

単調収束定理 (2)

f_n ($n = 1, 2, \dots$) : 可測関数,

$f_n \uparrow f$, $\int f_1 d\mu$ は有限値.

↓

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu = \int f d\mu.$$

優収束定理

f_n ($n = 1, 2, \dots$): 可測関数, $f := \lim_{n \rightarrow \infty} f_n$.

ある可測関数 g が存在して

$$|f_n| \leq g, \quad \int g d\mu < \infty.$$

↓

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu = \int f d\mu.$$

これらの極限定理の証明は「補遺」に載せます。

動画では証明を述べないので、概要欄 URL に載せてある当 PC スライドを御覧ください。

Contents

- 1 はじめに
- 2 ルベグ積分とどう付き合うか？
- 3 ルベグ積分論の概略 (1)：測度空間
- 4 ルベグ積分論の概略 (2)：積分
- 5 極限定理
- 6 リース・フィッシャーの定理**
- 7 まとめ
- 8 補遺

リース・フィッシャーの定理

リース・フィッシャーの定理

$$L^p = L^p(S) := \left\{ f : S \rightarrow \mathbb{R} \mid \int |f|^p d\mu < \infty \right\} \quad (p \geq 1)$$
$$\left(\|f\|_p := \left(\int |f|^p d\mu \right)^{1/p} \quad L^p(S) \text{ のノルム} \right)$$

は**完備**である。すなわち、 $L^p(S)$ の関数列 $\{f_n\}$ について、

$$\{f_n\} \text{ はコーシー列 : } \|f_m - f_n\|_p \rightarrow 0 \quad (m, n \rightarrow \infty).$$

↓

$$\{f_n\} \text{ は収束列 : } f_n \rightarrow \exists f \text{ in } L^p.$$

リース・フィッシャーの定理

リース・フィッシャーの定理

$$L^p = L^p(S) := \left\{ f : S \rightarrow \mathbb{R} \mid \int |f|^p d\mu < \infty \right\} \quad (p \geq 1)$$

は**完備**である。すなわち、 $L^p(S)$ の関数列 $\{f_n\}$ について、

$$\{f_n\} \text{ はコーシー列 : } \|f_m - f_n\|_p \rightarrow 0 \quad (m, n \rightarrow \infty).$$

↓

$$\{f_n\} \text{ は収束列 : } f_n \rightarrow \exists f \text{ in } L^p.$$

完備は解析学で重要な概念である。

\mathbb{R} は完備である。

数列・点列・関数列の収束を証明するのに、

- 具体的な収束先を知っている必要がない。
- 差が 0 に行くことを示せばよい。

リース・フィッシャーの定理

【リース・フィッシャーの定理の証明】 $\{f_n\}$ を L^p のコーシー列とする。
 $k = 1, 2, \dots$ に対し正の整数 $n(k)$ ($n(1) < n(2) < \dots$) が取れて

$$\|f_m - f_n\|_p \leq 2^{-k} \quad (\forall m, n \geq n(k)).$$

次の方針で定理を証明する。

- ① 部分列 $\{f_{n(k)}\}_k$ はある関数 $f \in L^p$ に収束する。
- ② もとの関数列 $\{f_n\}$ も f に収束する。

1° 関数 $\sigma_k(s)$ ($k = 1, 2, \dots$) を次で導入する。

$$\sigma_k(s) := \sum_{j=1}^k |f_{n(j)}(s) - f_{n(j+1)}(s)|.$$

各 s に対し $\{\sigma_k(s)\}_k$ は単調増加する実数列であるから、
 $+\infty$ を含めて極限 $\sigma(s) := \lim_{k \rightarrow \infty} \sigma_k(s)$ が存在する。

一方、ミンコフスキーの不等式 ($\|f + g\|_p \leq \|f\|_p + \|g\|_p$) より

$$\|\sigma_k\|_p \leq \sum_{j=1}^k \|f_{n(j)} - f_{n(j+1)}\|_p \leq \sum_{j=1}^k 2^{-j} \leq 1,$$

リース・フィッシャーの定理

【リース・フィッシャーの定理の証明 (続)】

$$\int \sigma_k^p d\mu \leq 1.$$

$0 \leq \sigma_k \uparrow \sigma$ であるから、単調収束定理より

$$\int \sigma^p d\mu = \lim_{k \rightarrow \infty} \int \sigma_k^p d\mu \leq 1.$$

したがって、a.a.s に対し $\sigma(s) = \lim_{k \rightarrow \infty} \sigma_k(s)$ は有限値である。

そして、 $\sigma \in L^p$ である。

関数 $\tau_k(s)$ ($k = 1, 2, \dots$) を次で定義する。

$$\tau_k(s) := \sum_{j=1}^k (f_{n(j)}(s) - f_{n(j+1)}(s)) = f_{n(1)}(s) - f_{n(k+1)}(s).$$

リース・フィッシャーの定理

【リース・フィッシャーの定理の証明（続）】

$$\tau_k = \sum_{j=1}^k (f_{n(j)} - f_{n(j+1)}), \quad \sigma_k = \sum_{j=1}^k |f_{n(j)} - f_{n(j+1)}|$$

であり, $\{\sigma_k(s)\}_k$ は a.a.s に対して有限値に収束するから,
 $\{\tau_k(s)\}_k$ は a.a.s に対し有限値に絶対収束 \Rightarrow 収束する.

$\tau(s) := \lim_{k \rightarrow \infty} \tau_k(s)$ とおく.

$$\int |\tau|^p d\mu \leq \int \sigma^p d\mu \leq 1 < \infty \text{ より } \tau \in L^p.$$

$$\begin{aligned} \tau_k = f_{n(1)} - f_{n(k+1)} &\rightarrow \tau \quad (k \rightarrow \infty), \\ f_{n(k)} &\rightarrow f_{n(1)} - \tau =: f \in L^p \quad (k \rightarrow \infty). \end{aligned}$$

ゆえに, $\{f_{n(k)}\}_k$ は L^p の収束列である.

リース・フィッシャーの定理

【リース・フィッシャーの定理の証明（続）】

2° $\{f_n\}$ 自体が f に収束することを示す.

$\{f_n\}$ は L^p のコーシー列であるから、任意に $\epsilon > 0$ を取ればある n_ϵ が存在し、

$$\|f_m - f_n\|_p \leq \epsilon \quad (\forall m, n \geq n_\epsilon).$$

$n(k) \geq n_\epsilon$ となるよう k を取れば、

$$\|f_m - f_{n(k)}\|_p \leq \epsilon \quad (\forall m \geq n_\epsilon).$$

$$\begin{aligned} \|f_m - f\|_p &\leq \|f_m - f_{n(k)}\|_p + \|f_{n(k)} - f\|_p \\ &\leq \epsilon + \|f_{n(k)} - f\|_p \quad (\forall m \geq n_\epsilon). \end{aligned}$$

$k \rightarrow \infty$ として、 $\|f_m - f\|_p \leq \epsilon$ ($\forall m \geq n_\epsilon$).

ゆえに、 $\{f_n\}$ は L^p の収束列である： $f_n \rightarrow f \in L^p$.

(証明了)

Contents

- ① はじめに
- ② ルベグ積分とどう付き合うか？
- ③ ルベグ積分論の概略 (1)：測度空間
- ④ ルベグ積分論の概略 (2)：積分
- ⑤ 極限定理
- ⑥ リース・フィッシャーの定理
- ⑦ まとめ**
- ⑧ 補遺

動画のまとめ.

- ① ルベグ積分論は簡単な教科書で勉強してしまおう.
- ② ルベグ積分の概略.
 - 測度空間, 積分の定義.
 - 極限定理: 積分と極限操作が可換である条件.
 - リース・フィッシャーの定理: L^p 空間の完備性 (証明付き).

本動画ではルベグ積分論の初歩的部分を駆け足で述べましたが, もっと本格的に勉強するなら, 本動画を基にして適切な教科書にあたっていたら幸いです.

動画のまとめ.

- ① ルベーク積分論は簡単な教科書で勉強してしまおう.
- ② ルベーク積分の概略.
 - 測度空間, 積分の定義.
 - 極限定理: 積分と極限操作が可換である条件.
 - リース・フィッシャーの定理: L^p 空間の完備性 (証明付き).

本動画ではルベーク積分論の初歩的部分を駆け足で述べましたが, もっと本格的に勉強するなら, 本動画を基にして適切な教科書にあたっていただけたら幸いです.

Thank you very much!

Contents

- ① はじめに
- ② ルベグ積分とどう付き合うか？
- ③ ルベグ積分論の概略 (1)：測度空間
- ④ ルベグ積分論の概略 (2)：積分
- ⑤ 極限定理
- ⑥ リース・フィッシャーの定理
- ⑦ まとめ
- ⑧ 補遺**

補遺：単調収束定理 (1) の証明

$$0 \leq f_n \uparrow f \text{ より } 0 \leq \int f_n d\mu \leq \int f d\mu.$$

よって、 $\left\{ \int f_n d\mu \right\}$ は上に有界な単調増加列なので収束し、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu \leq \int f d\mu.$$

逆の不等号を示す。

$\epsilon > 0$ 任意, $\mathcal{O} = \{ M(1), \dots, M(q) \} \subset \mathcal{M}$ 有限個の可測集合族.

$n = 1, 2, \dots, k = 1, \dots, q$ に対し集合 $M(n, k)$ を次で定義する.

$$M(n, k) := M(k) \cap \{ f_n \geq \underline{f}(M(k)) - \epsilon \}$$
$$\left(M \in \mathcal{M} \text{ に対し } \underline{f}(M) := \inf \{ f(s) \mid s \in M \} \right).$$

このとき、次が成り立つ。

$$\int_{M(k)} f_n d\mu \geq \int_{M(n, k)} f_n d\mu \geq (\underline{f}(M(k)) - \epsilon) \mu(M(n, k)).$$

補遺：単調収束定理 (1) の証明

$M(n, k) \uparrow_n M(k)$ より $\mu(M(n, k)) \uparrow_n \mu(M(k))$ であり
(μ の完全加法性から言える), $n \rightarrow \infty$ とすることにより

$$\int_{M(k)} f_n d\mu \geq (\underline{f}(M(k)) - \epsilon) \mu(M(k)),$$

$\epsilon > 0$ は任意だから,

$$\int_{M(k)} f_n d\mu \geq \underline{f}(M(k)) \mu(M(k)).$$

$k = 1, \dots, q$ について和を取れば,

$$\int f_n d\mu \geq \sum_{k=1}^q \int_{M(k)} f_n d\mu \geq \sum_{k=1}^q \underline{f}(M(k)) \mu(M(k)) = \underline{\sum}_{\theta} (f),$$

$$\therefore \int f_n d\mu \geq \sup_{\theta} \underline{\sum}_{\theta} (f) = \int f d\mu,$$

$n \rightarrow \infty$ として所望の不等式を得る.

(単調収束定理の証明了)

補遺：優収束定理の証明

まず、次の補題を準備する。

ファトゥー (Fatou) の補題

可測関数列 $f_n \geq 0$ ($n = 1, 2, \dots$) に対し、

$$\int \liminf_{n \rightarrow \infty} f_n d\mu \leq \liminf_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu.$$

【証明】 $0 \leq \inf_{k \geq n} f_k \uparrow_n f := \liminf_{n \rightarrow \infty} f_n$ であるから、単調収束定理より

$$\int f d\mu = \lim_{n \rightarrow \infty} \int \inf_{k \geq n} f_k d\mu.$$

一方、

$$\inf_{\kappa \geq n} f_\kappa \leq f_\kappa \quad (\kappa \geq n) \quad \text{より} \quad \int \inf_{\kappa \geq n} f_\kappa d\mu \leq \int f_\kappa d\mu \quad (\kappa \geq n),$$

$$\int \inf_{\kappa \geq n} f_\kappa d\mu \leq \inf_{\kappa \geq n} \int f_\kappa d\mu.$$

$n \rightarrow \infty$ として,

$$\int f d\mu = \lim_{n \rightarrow \infty} \int \inf_{\kappa \geq n} f_{\kappa} d\mu \leq \underline{\lim}_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu.$$

(Fatou の補題の証明了)

補遺：優収束定理の証明

【優収束定理の証明】 $0 \leq \pm f_n + g$ であるから、ファトゥーの補題より

$$\int \underline{\lim}_{n \rightarrow \infty} (f_n + g) d\mu \leq \underline{\lim}_{n \rightarrow \infty} \int (f_n + g) d\mu,$$
$$\int \underline{\lim}_{n \rightarrow \infty} (-f_n + g) d\mu \leq \underline{\lim}_{n \rightarrow \infty} \int (-f_n + g) d\mu.$$

2つの不等式の両辺から $\int g d\mu$ を引いて

$$\int \underline{\lim}_{n \rightarrow \infty} f_n d\mu \leq \underline{\lim}_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu \leq \overline{\lim}_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu \leq \int \overline{\lim}_{n \rightarrow \infty} f_n d\mu.$$

いま,

$$\underline{\lim}_{n \rightarrow \infty} f_n = \overline{\lim}_{n \rightarrow \infty} f_n = \lim_{n \rightarrow \infty} f_n =: f$$

と仮定しているから、上の不等式の最左辺と最右辺は一致し、はさみ打ちにより

$$\int f d\mu = \underline{\lim}_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu = \underline{\lim}_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu = \overline{\lim}_{n \rightarrow \infty} \int f_n d\mu.$$

(証明了)